

或る小さな終活

馬場 駿

「校正」では字句や文章の明らかな誤りを診(み)る。

「推敲」では、個々的には正しいものでも、削除(トル)を含めた、より適切な文章選択があるかどうかを診る。

「校閲」では、さらに高い視点もしくは広い視野から、或は専門的観点から作品全体を診る。もちろんこれは、あくまでも私見だが、それでは、それらを終えたはずの【上梓】の後で、作者が感じるある種の後悔と、抱えてしまう恐懼のようなものの正体は何なのか。

翻(ひる)がえって、『小説太田道灌』『夢の海』に続く『孤往記―愛おしき蒼さのなかで―』で、三回目の上梓手続きを終えたいま、自分にとって「出版」の意義とは何なのかを改めて考えてみたくなった。換言すれば、単行本にする動機の検証である。

『小説太田道灌』の場合、創作自体ではなく本にする動機に限って言えば、死後に遺すものが欲しかったからと断言できそうだ。対物で済んだが、交通事故に遭った。

以後、運転中に対向車と正面衝突をする可能性に怯え始めた。いつ死ぬかもしれないのに、自分には生きてきた確かな証が何もない。まだ「息」をしている間にできることはないのか。今にして思えば特異な心理状態だった。しかし契機はともかくとして、上梓するための「版下」作りに没頭している間に、「還暦の記念に」という健康的な動機づけに変化してはいる。

素人が自分で未熟ながらも本を編むのだ。多少の異常性は必須条件かもしれない。

同人誌は、言うなれば仲間の作品を載せるものだ。文章の巧拙や内容の誤謬(ごびゅう)についても、多少の甘えは許される。だが上梓となれば違う。歴史に絡むとなればなおさらのこと。刷り上がり、図書館に寄贈し、友人知己に送り、ネットで販売し、さらには書店に並べたあと、戦々恐々とした日々が続いたことを告白する。

結果は、本は完売し、数十通の批評・感想のお便りを頂戴した。太田道灌の末裔の方々との誼(じ)よししみも生まれた。望外の喜びとはこういうことだろう。

しかし、道灌研究家の方々から拝受した資料の数々は、筆者の身を疎(すく)ませるに十分なものだった。唯一の

救いは、それらが『小説太田道灌』執筆時には書籍化されていなかったという事実。逆に言えば、当時存在していたならば、あれほど史料収集に苦勞はしなかっただろう。いずれにせよ流通させてしまった本は、銃から発射された弾丸と同じなのだ。

単行本『小説太田道灌』は私に、上梓する喜びと怖さを同時に、強烈な形で教えてくれたことになる。

東日本大震災と津波、さらには原発事故をみて、自分の人生までもが殆んど終わつたような気がした。事実生活を極限まで縮小しようと試みた。それから一年経つた頃、受けた衝撃と多少の余裕を回復した心が複雑に絡んだ末、「もう一冊出したい」との結論に達した。いつ訪れるかもしれない災害や死、それを意識したからに他ならない。選んだのは『夢の海』だ。この作品には入力済みのデータがなかった。まずはベタ打ちを岩瀬会員のY氏に依頼、帰ってきたデータを版下にまで持つていく自らの作業も半年近くかかった。コツコツと積み上げていく中で、迷いも生じた。齢六十五、老後の貴重な蓄えを印刷代に回してよいのか、それほどの意味が「上梓」

にあるのかと。日々の労働と蓄積する疲労が漸(ようや)く作業ペースを落としていく。ではなぜ数十頁に及ぶ追補まで可能になったのか。皮肉にも原動力になったのは日々摩耗を続ける精神そのものだった。それでも揺らぐ心。ところがある日、大きな力が働く。三人の旧知の「友」が職場に泊まつたのだ。彼らは、私が受験時代に中学校の管理員をしていた当時、新任の教師として赴任をしてきた。美術を、部活を、教育を、真剣に語り合つた人たちだ。聞けば三人とも学校長まで昇り詰めて定年を迎えたという。ただそれだけの話だが、これで二回目の「上梓」は私の中で確定となった。

『夢の海』の評価は結果的に二分された。途中で読むのを止めた人にとってはゲテモノ作品、最後まで読んだ人にとっては愛憎を深く抉(えぐ)つた文芸作品と。批評文を寄せてくれた数十人の読者は後者、一方沈黙を守り通した方はほぼ前者だ。藤沢の常連読者は言う。作品としては良い、「あとは好き嫌いの問題」だ。

二回目の上梓が私に教えたもの。それは、小説は出版を経て、作者の想い如何に拘らず一人歩きをする数が爆発的に増えるということだった。

だからと言って、風当りを恐れて表に出なければ、温かい陽差しを受けることもない。この理はきつと胸に仕舞っておきたいと思う。

あと四か月ほどで六十七歳になるという晩秋に、前述の両作品をネットで販売できる途があるがどうかという話が入ってきた。結論から言えばペンディングにしたのだが、「制作」担当者が私の関連作品を縦書きで読むために、ホームページ蛙声庵からデータをとってPDF化したものを寄贈してきた。二百六頁に及ぶ『孤往記』がそれだった。作者のくせに恥ずかしいのだが、岩漿に「連載」という形をとっていたせいで、全編を通読するのは初めてだった。公休日に五時間を費やして精読した私は、知らず知らずのうちに「校正」もしていた。「自伝ではないが、たしかに私は小説の中に居る」とかつて語ったこの作品。いつしか読者として目頭を熱くしていた。「なんだ、この感覚」。私の人生を決定づけた青春時代が否応なしに蘇える。

まっすぐな主人公が味わった孤独、囚われた悩み、求めた人のぬくもり、突き進んだ遠い夢。もしかしたらこの

奥底にあるものは普遍的なものかもしれない。我が田に水を引いた私は、第三の上梓を決意した。

もともとこの作品は、親族、友人知己など縁（えにし）のあった人たちに「遺す」メッセージとして考えたもので、岩漿初出は平成十一年、何と十五年も前になる。連載の終りは平成二十三年、東日本大震災の春に当たる。こじつけではなく、実は岩漿もこの年で終焉を迎えると思っていた。

あれから丸三年の春。小説『孤往記』がネットを使って一つになる。

こうしてみると、上梓に向けた行為は進めていても、理由は区々だが常に躊躇（ためら）いがあつて、歳月がいたずらに過ぎていったようにも見える。もう一つ。この障壁を乗り越えるための引き金は、比較的小さな「きっかけ」という点も共通である。

このカミングアウト・エッセイを書き終えて、ふと思つた。私の上梓は「終活」の色彩を帯びていると。